

館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

11月 1日 今日の通読箇所 イザヤ書 32章1～8
「理想の国」

[1～4節]には理想の王と政府に指導される、理想の国が描き出されている。しかし現実の地上の国は[6～8節]の状態なのだ。今は銀行や政治家など、富や権力の集中する部門の、不正、汚職のニュースの絶間がない。彼等は本来、権力者、指導者の根本的な資格を欠いているのだ。聖書の光から言えば実は愚か者だ。それが地位を得、形式的な尊崇を受けている。ここに悲劇、あるいは喜劇があるのだ。キリストの再臨の後キリストが世界を統べ治め、神の僕たちがこれを助ける時、はじめてここに描かれた理想の神の国が実現し、我々も安心、納得して生きられるだろう。

11月 2日 今日の通読箇所 イザヤ書 32章9～16
「上よりの霊」

「しかしついには霊が上からそそがれて、荒野は良き畑となり、良き畑は林のごとく見られるようになる[15節]」これはイスラエルの回復の預言だが、我々の働きにもこの預言の成就がほしい。我々も伝道に努力しているが、いつも収穫は少なく、人心は種を蒔いても受け付けない荒野のようだ。しかし、主の霊が上から注がれる時、多くの実が結ばれ、教会も開拓地も、この地方も見違えるほど豊かな収穫に覆われ、神を賛美する会衆に溢れるだろう。我々が祈り、かつ努力する間に、必ずこの預言が成就することを、信じて進もう。

11月 3日 今日の通読箇所 イザヤ書 33章1～9
「一生の宝物」

「一生の生活の確立」が我々の努力の目標だ。財も地位もそのためにこそ求められる。しかし[6節]には「主は救いと知恵と知識を豊かにして、あなたの代を堅く立てられる」とある。我々の人生の確立は、財や地位ではなく、主の救いと知恵と知識が土台なのだ。これがなくては、生活は不安で粗雑で、決して心の満足はない。しかもこの土台を欠いた場合、ずいぶん定評のある富裕、賢明な人でも、ここはという大切な場面でしばしば方向を誤る。金持ちと言われる日本で、新聞やテレビは毎日その実例を提供しているのだ。「主を恐れることはその宝である」とは本当だと思う。

11月 4日 今日の通読箇所 イザヤ書 33章10～22

「天国の門」

スポルジョンは「天国には恐らく門も障壁も要らない。悔い改めなかった罪人にとって、聖なる神の臨在する天国ほど恐ろしいところはないだろう。罪人は追い出さなくても自分で天国から逃げ出してゆく」といった。ここに「われわれのうちだれが焼き尽くす火の中におることができよう。だれがとこしえの燃える火の中におることができよう[14 節]」とあるのを見ればその言葉も思われるのだ。黙示録にも、王、高官、富める者などが再臨の主を恐れて、洞穴や岩陰に身を隠し、山と岩に向かって「さあわれわれをおおって、御座にいます方のみ顔と小羊の怒りとからかくまってくれ」と叫ぶことが書いてある。

11月 5日 今日の通読箇所 イザヤ書 34章1～17

「繁栄と滅亡」

ここには神に従わない諸国が終末において、神の怒りのもとに滅び去る様が預言されている。すでに今、エジプトの遺跡を見、バビロン、ペルシヤの遺跡が散乱するメソポタミヤを見れば、権力の限りを尽くして栄えた帝国の跡は、悲哀としか言い様がない。現時代に栄光を誇る諸国も不敬虔の報いは免れられないだろう。「あなたがたは主の書をつまびらかに尋ねて読め。これらのものは一つも欠けることなく、その連れ合い(預言の成就)を欠くものはない。主の口がこれを命じ、その霊力が彼等を(聖書を)集められたからである[16 節]」

11月 6日 今日の通読箇所 イザヤ書 35章1～10

「砂漠の川」

「荒野」「砂漠」を見た者はその荒涼とした救いがたい景色を忘れないだろう。ことに世界の公園と呼ばれるほど水の豊かな日本人には強い印象だ。それゆえ砂漠の民の水に対する強烈な憧れも察する事ができるのだ。「砂漠に水が湧き川が流れ、サフランの花が咲き、レバノンのように香柏の森林が茂る」再臨の時の回復の預言はイスラエルの心を躍らせた。これはまた、救われた者の喜びの表現でもある。ノンクリスチャン時代の砂漠のような状態は変り、心も生活も家庭も、花咲き鳥唄う、美しく幸福で、感謝のありさまに変わったのだ。

11月 7日 今日の通読箇所 イザヤ書 36章1～12

「信仰の沈黙」

アッシリアの王はユダの町々を荒らし回っていきリブナにいる。エジプトはこの地方が完全にアッシリアのものになるのを好まないから、間もなく介入してくる恐れがあって、実はアッシリア王も気が気でないのだ。いまだちにエル

サレムを降参させようと脅迫する言葉がおおげさで宣伝的なのも、彼の焦りの現れなのだ。彼は「エジプトは当てにならない」というだけでなく、イスラエルの寄り頼む神も当てにならないと罵倒する。主はこの言葉を聞いておられる。この時エルサレムの市民が動揺せず神とヒゼキヤ王に信頼して一言も答えなかったのは立派だった。

11月 8日 今日の通読箇所 イザヤ書 36章13～22

「おためごかし」

アッスリア王セナケリブの使者ラブシャケは(彼は別に鮭好きでもない)イスラエル王ヒゼキヤとその神の無力をしきりに鳴らして、エルサレム市民に降伏を勧めた。それとともに、降伏したイスラエルが捕虜になった場合どんなに優遇され、どんなに安全、幸福になれるかということ、口を極めて宣伝した。これは悪魔のやり口に似ている。悪魔も、クリスチャンを誘惑する時に、信仰を捨てて自由に生活さえすればただちに幸福になれると誘う。信仰が幸福を妨害していると、思い込ませるのだ。ばかな話だが、試みが続いて気持ちの弱っている時などつい引掛かるから、信仰で心を固めていなければならない。

11月 9日 今日の通読箇所 イザヤ書 37章1～20

「ヒゼキヤの祈り」

アッスリヤ王の脅迫は続く。しかしこれも、エチオピア王テルハカ出撃の情報を恐れる彼の虚勢、焦燥に過ぎない。ヒゼキヤは使者を使わして預言者イザヤに祈りを求める一方、自分も神殿に入り、アッスリヤ王の脅迫状を神の前に開いて、切に神の助けを祈った。「万軍の主よ。地の全ての国のうちで、ただあなただけが神でいらせられます。耳を傾けてお聞きください。目を開いて見てください。セナケリブが生ける神をそしるために書き送った言葉を聞いてください。主よどうぞ、われわれを彼の手から救い出してください」主はこの祈りを聞いて、この時も奇跡的に、イスラエルを救って下さったのだった。

11月10日 今日の通読箇所 イザヤ書 37章21～38

「作品詩篇46篇」

見せかけの脅迫でエルサレム市民をヒゼキヤ王に背かせ、降伏させようとしたアッスリヤ王も、今は神の手に陥り、ほとんど壊滅状態で、国に逃げ帰った。この敗戦によって、人心を失った王は、遂に暗殺に落命することになったのだった。我々の大好きな詩篇46篇は、この時ヒゼキヤ王、またはその側近によって作られた詩篇だと言われている。しかも女性のソプラノで歌われたらしい。今この詩篇を、そのつもりで読み返して見ると、内容も事蹟に当てはまるのを

感じ、ヒゼキヤ王とその市民たちの喜びも伝わって来るといふものだ。同時にまた、改めて信仰を励まされる。

11月11日 今日に通読箇所 イザヤ書 38章1～16
「祈りと涙」

ヒゼキヤ王が重い病気になったのは、アッシリヤ軍との問題が、まだ全くは片づいていなかった頃だと思ふ。人はやりかけた仕事が片づかず、心残りのまま死ぬケースが多いらしい。ヒゼキヤ王も重い責任のある立場だから、アッシリヤ軍が完全に撤退して、国が本当に平和になるまでは、死んでも死にきれない気持ちだったろうし、国民も王の危篤のニュースを聞いては、時が時だけに心細い限りだったに違いない。ヒゼキヤ王の敬虔で忠実な生活、その祈り、その目にある涙は、この時神のみ心を動かし、病が癒され、15年の余命が許されたのは、本当に感謝だった。

11月12日 今日に通読箇所 イザヤ書 39章1～8
「軽率と虚栄」

とうとう北王国を滅亡に追いやったのみか、長くユダをも苦しめたアッシリヤに、いまバビロンという強敵が現れた。バビロンはユダと協力して、アッシリヤを滅ぼしてしまおうという機運になってきたのだ。その使節がヒゼキヤ王を訪れた。王が気を良くして、喜んで協力を誓い、得々と自国の武器弾薬、財宝のたぐいを見せたのも無理もない話だ。しかしそこまで相手を信用して、手のうちを見せるのは軽率で、王者の振舞いではない。イザヤはまたそこに、ヒゼキヤ王の虚栄心を見たのだろう。ヒゼキヤ王ほどの人でも、いつでも、どんな場面でも、どんな点でも、全て完全というのは難しい。注意が必要なのだ。

11月13日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 1章1～11
「キリストを知る知識」

2節には、神様と主イエス・キリストを知ることによって恵みと平安とが豊かに加わるように、とあります。キリストを、個人的に、正しく知るなら、神様の恵みと魂の平安が増し加えられるのです。3節にはわたしたちを召された方を知る知識によって、いのちと信心のために不可欠で、ふさわしいすべてのものが与えられている、とあります。神様の約束に加えて、信仰を訓練して豊かな品性を備えるなら、8節にはキリストを知る知識について実を結ばないことがないとあります。このようにして、救われた召しと選びについて、真剣に確固としたものとするなら、躓くことなく、御国に入る恵みに与るのです。

11月14日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 1章12～21
「キリストの力と来臨」

ペテロは、12節から主を知る知識が強固な根拠によって確証されていることを語ります。その一つに、「キリストの力と来臨」<再臨のこと>(16節)は「わたしたちが、そのご威光の目撃者」(16節)であるという事実によって確証できると言うのです。ペテロはイエス様が変貌された時、「人の子が死人の中からよみがえるまでは、いま見たことをだれにも話してはならない」(マルコ9:9)といわれていました。ところがキリストは死人の中からよみがえったのです。だから主の復活は、神の御力による「来臨」を約束するのです。

11月15日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 2章1～10
「確実な裁き」

ペテロは、この章の冒頭から、イスラエルの歴史において多くの偽教師の現れたことなどを示し警告を与えています。そしてペテロは、偽教師に対する神様の裁きがどんなに厳しいものであるか、旧約聖書の三つの事例で実証しています。第一は、罪を犯した御使いたちは、地獄に落され裁きの時まで暗闇の穴の中に閉じ込められていること。第二は、ノアの時代の不敬虔な人々、ノアの伝える神様の命令に従わなかった人々を洪水によって滅ぼされたこと。第三は、ソドムとゴモラで放縦な生活をしていた人々が天からの火で滅ぼされたことです。そして神様は、今でも異なる福音を伝える者を同様にするのです。

11月16日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 2章9～16
「偽教師の姿」

ペテロは、偽教師の行く先は滅びだと、厳しく記しています。この厳しい指摘の理由は、2章1節のように、彼らが、自分たちを贖って下さった主を否定し、たくみに異端の教理を持ち込んだからです。またそれによって多くの人々が惑わされ、神様の教えの道が汚名を着せられ非難される危険があったからです。彼らは、自ら罪を求めて飽くことを知らないだけでなく、信仰に入りたての人々をだまし同じ過ちに引き込むのです。ものの道理をわきまえない獣のようにふるまい、いずれは自分自身の墮落によって滅ぼされるとあります。昔の偽教師バラムは、報酬の為にイスラエルを呪うことさえしました。このとき神様は、物言わない口バが人間の声でものを言うという方法で、バラムを戒め、その行いを、阻みなさいました。(民数記22章)

11月17日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 2章17～22
「空虚な教え」

偽教師の教えの空しさについて、二つの例が挙げられています。第一は、水のない井戸。乾燥した砂漠地帯に生きる人々にとって、水を求めてやって来た井戸が、空井戸だったなら、これほど期待を裏切るものはありません。また、命の危険が伴います。命の源である主を否定して、どんなに巧みな教えを語っても、人々は主にある命を受けることはできません。第二は、突風に吹きはらわれる霧。天候が変わって突風が吹くと、霧は簡単に吹きはらわれてしまいます。そのように、彼らの教えは頼りにならない、一時的なうわべだけのことだということです。彼らは人々に自由を約束します。しかし、自分自身は自由がなく、キリストを否定し罪の奴隷です。罪と裁きから解放されて真の自由を受けるには、キリストによる以外にはありません。

11月18日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 3章1～7
「主の来臨の約束」

ペテロがこの第二の手紙を書いた目的は、第一に、みことばを思い出させて受取人を励ますためです。第二は、終わりの時に、再臨の約束を侮る偽教師の出現を知らせ警告を与えるためです。偽教師の数々の有害な教えの中で、特に破壊的なのは再臨の約束を否定する教えでした。偽教師たちは「主の来臨の約束はどうなったのか。...すべてのものは天地創造の初めから...変わってはいない」(4節)ということです。しかしノアの大洪水の時に、箱舟に入ったノアを含む家族8人と数々の生き物以外は、みな滅びて、地は新しく変わったのです。同様に、終わりの時には不信仰な世界は火によって滅ぼされ、義の住む新しい天と新しい地(13節)と変えられるのです。

11月19日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 3章8～13
「主の来臨の備え」

昔から今に至るまで、再臨の日を定めて人々を惑わすものがありました。だから、イエス様は前もって「その日、その時はだれも知らない」(マタイ 24:36)と教えられたのです。それでもペテロの手紙を受けとった人々は、終わりの時、再臨の時は遅いと思っていたようです。しかし、永遠の神様にとっては、「一日は千年のようであり、千年は一日のようである」(8節)のです。「主の来臨」が遅れている理由は、一人でも多くの人が悔い改めて救われるためなのです。それは神様の限りない寛容と忍耐と愛のゆえです。「しかし、主の日は盗人のように襲って来る」(10節)のです。だから、絶えず目を覚まし、神の日の到来を待ち望みつつ、きよく信心深い行いをし、主の来臨に備える事が大切です。

11月20日 今日に通読箇所 ペテロの第二の手紙 3章14～18
「静かな確信」

主の来臨の時、しみもきずもなく、恐怖や心の葛藤のない静かな確信を持って平和のうちに、主に見ていただける者として励むようにとあります。信仰による確信と平安のうちに、日々過ごすことが大切で、幸福なことです。主は、悪を裁き、世界を裁くことを遅らせて、だれひとり滅びることなく、すべての人が悔い改めに至ることを望んで忍耐しておられます。「主の寛容は救い」(15節)であると、主のご忍耐とゆるしのうちに今日も生かされていることを思うべきです。聖書の理解しにくい箇所について、曲解してはならないこと、誤った言葉に誘われて、現在の信仰の確信から落ちないように気をつけなさいとあります。受ける資格がない者に与えられたキリストの愛を日々深く知り、恵みに成長し続けるように勧められています。

11月21日 今日に通読箇所 ヨハネの第一の手紙 1章1～4
「この手紙の目的」

使徒ヨハネがこの手紙を書いた目的は、クリスチャンたちが「父ならびに御子イエス・キリストとの交わりにあずかるようになるため」(1:3)であり「喜びがみちあふれるため」(1:4)であり「罪をおかさないようになるため」(2:1)であり「永遠のいのちを持っていることを、悟らせるため」(5:13)であります。一節に「いのちの言」と書いてあるのは、イエス・キリストのことで、このお方が天地創造の時すでに存在しておられた「永遠の神」を現しているのです。そこで使徒ヨハネは、このお方から耳で聞き肉眼で見たと証したのです。そして使徒ヨハネが、このお方の事を伝えたのは、仮説でも空想物語でもない実際に体験した事だからです。

11月22日 今日に通読箇所 ヨハネの第一の手紙 1章5～10
「光の神」

ヤコブの手紙1章には「あらゆる良い贈り物、あらゆる完全な賜物は、上から、光の父から下って来る」。詩篇104篇には「わが神、主よ、あなたはいとも大いにして誉れと威厳とを着、光を衣のようにまとい」とあります。ヨハネがイエスさまから聞いて告げ知らせることは「神は光であって...」(5節)ということでした。光は夜の暗闇から明るい朝へと世界を変えます。光と闇は共存できません。光が差し込むと、ほこりや汚れがよくわかるように、光は罪を明らかにします。罪人である、わたしたちは「罪はない」と言うべきでなく、罪を認め、流れに洗われ続ける小石のように、御子イエスさまの血にきよめられ続け、光の中を歩み続けるべきなのです。

11月23日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 2章1～6

「義なるキリスト」

「あなたがたがキリスト・イエスにあるのは、神によるのである。キリストは神に立てられて、わたしたちの知恵となり、義と聖とあがないとになられたのである。」コリント人への第一の手紙1章30節には、キリストご自身のお姿と、キリストにある者は、キリストの義と聖さのゆえに受け入れられた、尊い恵みが教えられています。旧約聖書にも「義の上衣」に覆われる幸いが教えられ（イザヤ書61章10節）新約聖書にはキリストのたとえ話に、王子の婚宴に招かれた人々に、王様が婚礼の服を用意してくださる招きの教えがあります（マタイ福音書22章）。キリストにある義の衣を着せられ、義という立場を与えられた者たちのために、主がとりなしていてくださるのですから、信仰を強めていただき主を見上げつつ歩み続けましょう。

11月24日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 2章7～11

「古くて、しかも新しい戒め」

ヨハネは7、8節で要約すると「古くて、新しい戒め」を書き送ると書いています。その「戒め」は6節に示されているように、イエス様にならって生きるということです。「古い戒め」とは、旧約聖書にあったものという意味で、事実レビ記19章18節には隣人愛の戒めが記されてあります。「新しい戒め」とは、イエス様はその愛の模範を見せてくださったという意味で新しい戒めです。イエス様が最後の晩餐の席で弟子たちに「わたしは、新しいいましめをあなたがたに与える、互に愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互に愛し合いなさい。」（ヨハネ13:34）とお命じになりました。この「イエス様の愛の戒め」こそヨハネが言う「古くて、新しい戒め」なのです。

11月25日 今日の通読箇所 ヨハネの第一の手紙 2章12～17

「世を愛するな」

ここでヨハネはクリスチャンが、恵みにより、信仰によって、罪がゆるされ、初めからおられる方を知り、悪しき者に勝った者であることを再確認するように勧めたのです。そこでクリスチャンに、「世と世にあるものを愛してはいけない」（15節）と命じたのです。なぜなら「世」は、神様に対立するものであり、サタンの支配下にあるからです。人は二つを同時に愛することは出来ません。世を愛するか、神様を愛するかです。サタンは人間を「肉の欲、目の欲、持ち物の誇」（16節）をもって誘惑し、罪に陥れようとするのです。だから私たちは、永遠に生きるために、「世」に対する十分な警戒が必要なのです。

1 1月26日 今日に通読箇所 ヨハネの第一の手紙 2章18～23
「光と闇の共存の時代」

「終りの時」については旧約聖書に預言されていました。「終りの時」は、キリストご降誕によって始った時代を指します。初代教会時代も、現代もそこに含まれます。やがてキリスト再臨によって新しい時代が到来するまでは、この世の闇が共存する時代です。反キリスト(18節等)、偽り者(22節)とある「イエスがキリストであることを否定する者」(22節)について警告されています。その出現によって終りの時であることがわかります。私たちは、光と闇が共存している時代に生きています。しかし、キリストを信じる者は「聖なる者に油を注がれている」(20節)のです。ですから、すべてのことを教えられ導いて頂けるのは幸いです。

1 1月27日 今日に通読箇所 ヨハネの第一の手紙 2章21～29
「キリストにとどまっていなさい」

御子を告白する者、すなわちキリストを救い主として信じ従う者は、父なる神様にも、知られています。反キリスト、偽り者である人々はともかく、キリストを信じている者は、初めから教えられている主キリストの教えを心にとどめていなさい、そうすれば、御子キリストと父なる神様のうちに常にとどまることとなります。また、御子キリストを告白する者は「キリストからいただいた油」(27節)すなわち、「真理の御霊」である聖霊が、すべてのことを教えてくださるのです。キリストのうちにとどまり、聖霊が教えてくださるとおりに歩むことがとても大切だと教えられています。日々キリストを見上げて歩み、またキリスト来臨の時、御前に恥じ入ることなく喜びをもってお会いできるために。

1 1月28日 今日に通読箇所 ヨハネの第一の手紙 3章1～7
「神の子の生活」

使徒ヨハネは一章と二章において神と交わる者が「神の子」であることを示し、三章では「神の子の生活」が、具体的にいかなるものであるかを述べています。まずそのために「わたしたちが神の子と呼ばれるためには、どんなに大きな愛を父から賜ったことが、よく考えて見る」(1節)ということです。次に、私たちは神の子としてどうなるのか(2節)、そしてわたしたちが神の子として、今、この世をどのように生きるべきか(3節)、という事をよく考えるように勧めたのです。それはこれらすべてのことが神の愛から出ているからです。即ちこの神の愛は、イエス様の十字架の贖いの死を通して、信じる者の罪を赦し、新しい人と生まれ変わらせることにより、その人を「神の子」とされたからです。

11月29日 今日的通読箇所 ヨハネの第一の手紙 3章8～12

「罪を犯さない生活」

ヨハネは「すべて神から生まれた者は、罪を犯さない」(9節)と述べています。一方では、著者自身がこの手紙の1章10節で「もし、罪を犯したことがないと言うなら、それは神を偽り者とする」ことだと言っています。これは表面的には矛盾していますがそうではありません。「罪を犯さない」とは、すべての罪から全く自由であるという意味ではないからです。クリスチャンも罪を犯してしまうことがあります。しかし故意に罪を犯すことはなく、常習的に罪を犯し続けてしまうことは絶対にはないのです。なぜなら、クリスチャンには「神の種が、その人のうちにとどまっている」からです。「神の種」とは「神の生ける御言」(第一ペテロ1:23)のことです。

11月30日 今日的通読箇所 ヨハネの第一の手紙 3章13～18

「主の愛」

イザヤ書53章には「ほふり場にひかれて行く小羊のように、また毛を切る者の前に黙っている羊のように、口を開かなかつた」と黙々と神様の御心に従うキリストのお姿があります。ガラテヤ人への手紙3章13節には「キリストは、わたしたちのためにのろいとなって、わたしたちを律法ののろいからあがない出して下さった」とあります。コリント人への第二の手紙5章21節には「神はわたしたちの罪のために、罪を知らないかたを罪とされた」とあります。キリストは、父なる神様の御前に罪そのものとして断罪され、呪いと裁きを受けて十字架で死なれました。主はわたしたちが受けるべき呪いと裁きを受けてくださいました。主を信じる者は裁かれることなく永遠の命を受けます。